

2021年入社内定者アンケート

Q.河北新報社を知ったきっかけ

- 私が高校一年生で宮城県に引っ越しをした際、地元の新聞は河北新報だと自然に知った。
- 高校生の時、日本史の授業で河北新報社の名前の由来を教えてもらったことがあった。
- 地元が東北地方なので、河北新報のことは以前から知っていた。
- 宮城県内に住んでいた祖父が自宅で購読していた。
- 河北新報社の学び応援チームによる「ぶっとべ！しんぶん部諸君」という企画に参加した事がきっかけで知った。ウェブマガジン『BGM』に自分が手がけた記事を掲載していただき、とても良い経験が出来た。また、サポートしてくださった社員の方がとても親切だった。
- 地方紙やブロック紙に興味を持っていたため、業界研究を進めていくなかで河北新報社を知った。また、数ある地方紙やブロック紙の中で、河北新報社は特に防災報道、災害報道に力を入れていると感じたため興味を持った。加えて、採用ホームページがとてもわかりやすく、掲載されている東北の写真が美しかったので、強く印象に残った。
- 新聞社といったら河北新報というイメージが小さい頃から強くあった。本社が私の家から近かったためにとっても身近な存在に感じていた。また、ドラマの「明日をあきらめない・・・がれきの中の新聞社～河北新報のいちばん長い日～」を視聴してから、河北新報の存在が強くなった。
- 河北新報は随所で販売されており、また大学の談話室にも置かれている。東北で暮らしていく中で、自ずと河北新報社を知り興味を持つようになった。

Q.受けた理由、動機

- 東日本大震災を機に、新聞記者を志すようになった。地元や読者を身近に感じて取材できる地方紙を志望する中で、震災に正面から向き合える新聞社は河北新報しかないと思った。また、宮城県生まれということもあり、記者として震災以外でも東北に携われることから志望した。
- 東日本大震災をきっかけに、生まれ育った東北で情報発信の仕事、特に報道関係の仕事に携わりたいと強く思った。宮城だけでなく東北地方全体を視野に入れて仕事をしたいと思い、受験した。説明会に参加させて頂いた際に、営業職がとてもやりがいのある仕事だと思った。
- ゼミ活動でヘイトスピーチについて調べていた時、国に先立ち対策を講じる自治体があることを知り、中央ではなく、問題が発生している地方に目を向けたいと考えた。地方の中でも生まれ育った東北の問題に関心があり、東北に大きな取材網を持つ河北新報社が最適だと思った。
- 第二の故郷である仙台、東北に貢献できる企業であること。様々な人と出会い、様々な場所に赴ける仕事であること。人や社会に影響を与えられる仕事であること。こういった理想を達成できる企業だと思ったため。
- 記者になりたかった。支局が多い全国紙も魅力的だったが、記者の基礎を学び報道に携われるのであれば地方でも差はないと考え、全国紙・地方紙問わず応募した。今までお世話になった地元の人々に自分の書いたニュースが届けられるのは、記者として良いモチベーションになるだろうと思った。結果的に河北新報との縁に恵まれた。
- 東北で働きたいというのが前提。その中で、自分の強みだと考えている好奇心の強さや行動力、体力を、ことばで発信する形でいかせる職種で絞っていき、河北新報社を志望した。
- 東日本大震災をきっかけに、情報をいち早く伝える重要性を実感した。小学生からの夢である新聞記者になるということを叶えようと思ったとき、祖父母方があり何度も訪れたことのある宮城県の新聞社で働こうと考えた。

- 会社説明会に参加したことで、会社の雰囲気は自分と合っていると感じた。説明会に参加する前から情報収集は行っていたが、やはり実際に会社に足を運んだことで社意欲が高まった。
- 東北と作文が好きだから。両親が東北出身であることや、出生時に仙台市に住んでいたことから、東北には人一倍の愛着がある。幼少期から大好きな作文という手段で、東北中に求められ、且つ世界中に東北の存在感を示したいと考えた。
- 地元の東北の地で働き、貢献したいとの思い強くあり、立地を重要点としながら就職活動を行った。企業研究をしていく上で河北新報社の「東北で働く、東北を伝える」という言葉が胸に深く突き刺さり、今まで知らない部分を知っていくことで入社したいという思いが強くなった。

Q.入社試験対策で力を入れたこと

(1) 筆記試験

- 大学で河北新報を毎日読み、東北でいま何が起きているのか、何が問題となっているのかを考えるようにした。時事問題についても毎日、新聞を読んだ。
- 時事問題対策は、日頃から新聞・テレビ等でニュースに触れたこと。
- 時事問題が重要だと思い、今まで気にしていなかった毎日のニュースを知ることから始めた
- 新聞を読み続けることが一番の対策。ジャンルを問わず新聞全体を偏りなく読み、漢字はテキスト一冊をじっくりやり込むことに重きを置いた。
- 河北新報だけでなく、全国紙や他県の新聞にも目を通し、気になった記事をノートにメモした。
- 英語が苦手であったため、定期的に英字新聞も購入し、読む習慣をつけた。

- 当日の朝刊を購入して試験直前まで読み込んだ。

(2) 作文

- どのようなテーマを与られても織り込みたいエピソードを予め整理した。
- 大学の先生に毎週作文の添削をお願いしていた。
- さまざまな題に対応できるようなネタをいくつか用意した。
- 購入したテキストをもとに作文練習を重ねた。自分の文章の癖などを把握して矯正することが上達への近道だと思った。私は一文が長くなる傾向があったので、短くわかりやすい文章を書くことを念頭に練習した。
- 記者志望の友人とテーマを決めて、制限時間内に書くという練習をひたすら繰り返した。

(3) 面接

- 友人と練習した。
- 大学の先輩や同輩に面接官役を頼み、対面式とオンライン式のいずれにも対応できるよう練習を重ねた。
- 伝えたいことを伝えきらずに終わってしまわないように、できるだけ具体的に話すことを心がけた。ただ、実際にはあまり手応えはなかった。
- 自分の想いを自己理解することが50%、それを言語化して面接官に伝えることが残りの50%。
- ありのままの自分を知ってもらうことが大切だと思ったので、事前練習は最小限にし、聞かれたことに対して思ったことをそのまま伝えるようにした。

- 自分はどんな人間か、なぜ河北新報社の営業職を志望したのか、どんな仕事をしたいか、特にこの三点を自分の中で明らかにして、ノートに考えを書くようにしていた。おかげで本番は、緊張こそしたが自分らしく答えられたと思う。
- 鋭い質問が多く、準備した問答集が役に立たず、その場で考えて返答することが多かった。答えをあらかじめ準備するのではなく、自分の価値観や社会問題に関する考え方を整理しておくことでスムーズに受け答えすることができた。
- 自分のこれまでの人生を振り返り「私はこういう人間だ」という軸を確立させた。そして自分の言葉で答えることを心がけた。話すときはなるべくゆっくりと、言葉の一つ一つに重みを持たせるように意識した。
- 河北新報が出している発行物を徹底的に読み込むことを重点的に行った。特に、2021年3月11日の河北新報は繰り返し読んだ。自己紹介や志望動機などの基本的な事柄は事前に話す内容を考えていたが、そのほかの質問に関しては事前に解答を考えるのではなく、面接中の会話を通して自分の思いを伝えるようにしていた。

(4) 企業研究

- 河北新報社ウェブサイトを読んだ。
- 朝刊や夕刊だけでなく河北新報社が発行している本も積極的に読んだ。
- 紙面を活用した。紙面を読み比べる際は各新聞社のニュースバリューの相違を意識して読んだ。紙面の読み比べは企業の特徴を掴むために重要なので、様々な新聞を読んだ。

Q.入社を決めた理由

- 志望度が最も高かったから。職業を決める上で最も重視していた、地域と職

種双方をかなえられると思ったから。

- 「東北のために作文する」という自らの本懐を遂げるには何としても河北新報社で働く必要があったので、入社を決めた。
- 河北新報のOBの方から「東日本大震災後は、震災で多くの犠牲者が出た反省から、将来の災害で1人でも命が助かるような報道をしてきた」という話を聞き、読者のための報道を本気でできる会社だと思った。また、新聞を読む中で、震災以外の記事でもジャーナリズムの基本である批判力が大切にされていると感じたから。
- 中学生の頃から働きたいと思っていた新聞社で働けること、自分の住む宮城県を中心として東北地方で働けること、この二点が大きな理由。社員同士でフォローし合うアットホームな雰囲気にも惹かれた。
- 高校生の時から河北新報社が東北に一番貢献できる新聞社だと考え、目標にしていた。県境をまたぐ問題に取り組みたいと考えているので、東北を網羅的に報道できる河北新報社はとても魅力的。
- 自分の理想を達成できる場所はここしかないと思っていたため。また就活を通して河北新報社の刊行物をたくさん読み、その中で東北への思いの深さや報道への誠実な姿勢を感じ、ここで働きたいという思いが増したことも決め手だった。
- 正直な自分の気持ちをぶつけた上で、内定をいただけたから。エントリーシートであまりウケが良くなさそうな取材テーマを選んだり、面接でも就活生的にかわいくない答えをしたりしたことがあった。それでも河北新報社は私を選んでくれた。「ここなら私のやりたいジャーナリズムが実現できる」と思った報道機関だけを受験していたので、入社を断る理由はなかった。
- 東北各県を実際に見て回り、河北新報が東北に与えている影響力の大きさを改めて実感したことも、入社への後押しとなった。また、就職活動中に東北に足を運び、河北新報に対する印象を聞いたところ、総じて好意的な声であったことも決め手となった。
- 新聞協会賞を何度も受賞し、東北の新聞社といえば「河北新報」だから。地

方紙として、その地域の人びとに寄り添う紙面づくりに携われる。かつ、記者として実力をつけることもできる会社だと感じたから。自分にゆかりのある場所で働きたいと考えているから。他と比べて愛着のある地だからこそ、その地を良くしようという気持ちを強く持って働けると考えた。

- 宮城で生まれ育ち、東北の地で働いて貢献したいという夢を叶えることができる1番の企業であると思った。見学した際に、新聞社であっても技術職が出来ることにより魅力を感じた。

Q.入社したらどんな仕事をやってみたいか

- 震災で被災された方から実際にお話を伺い、きちんと被災者の思いが伝わる文章で記事に遺したい。
- できるだけさまざまな地域を訪れ、できるだけ多くの人たちのお話を聴きたい。色々な分野に触れ、オールマイティな記者になりたい。
- 原発報道に興味があり、女川原発や青森県の核燃料サイクル施設の取材をする中で、将来のエネルギー問題について考えたい。
- 学んできた英語を活かす仕事。地域貢献を前提とした上で、企業理念にある「地域と世界の架け橋」という文言を実現すべく、英語での取材や日本語—英語間の翻訳といった、世界を念頭に置いた仕事も行ってみたい。
- 広告営業に携わりたい。まだ具体的にどうしたいかは見えていませんが、会社としての信頼だけでなく、個人としても信頼していただけるような営業になりたいです。
- 宮城の人たちの暮らしを豊かにする仕事がしたい。医療従事者へ向けて石巻の石ノ森萬画館でライトアップが行われたという記事を読み、帰省で宮城に帰るたびに足を運んだ場所が取材されていて誇らしい気分になった。読んだ人が「じぶんごと」だと思えるような、そして宮城を誇らしく思えるような記事を書きたい。

- 全部やりたい。入社3年目までは「来る者拒まず」のメンタリティで、あらゆることにチャレンジしたい。経験すること全てが、これからウン十年続くであろうジャーナリスト人生の糧になると思うから。最終的には社会部系記者になって、「人の弱さ」に寄り添うような報道がしたい。
- スポーツ、特に高校野球に携わる取材を行いたい。甲子園で未だに東北勢は優勝の経験が無い。東北勢の悲願である甲子園初優勝の瞬間をカメラに収め、その記事を書きたい。歴史的な瞬間に立ち会って、その場の空気感を表現できるような記者になりたい。
- 震災関連の問題は社会の関心が薄れているように感じているが、被災地にはまだ問題が存在しており、問題解決にむけて行動する人々にスポットを当てる記事を書きたい。また、東北各地で取材できることを生かして、地域の魅力を発掘し、東北の奥深さを全国に発信できるような記者になりたい。
- 学んできたことを活かしながら、自分にできることを増やしたい。今まで出会う機会がなかった人達に会えると思うので、沢山人達と知り合いながら自分の視野を広くしたい。東北にいるからこそ気付かなかった、東北の魅力をできるだけ多くの人に伝える手助けをしたい。

Q.就活生へのメッセージ

- 頭で考えるよりも、現地に足を運ぶことが、記者としては大切です。できれば東北各地に足を運び「自分はここで記者として何をしたいのか」という具体的なイメージが持てるといいと思います。
- 「想い」のある記者になってください。あなたを必要としている人が必ずどこかにいます。いつか記者仲間として一緒に働ける日が来るのを楽しみにしています！
- 何をしたいのか。これを明確にしようと努めた結果、最善の選択をすることができたと自負しています。得手不得手などは着手し継続してから判断するものだと思うので、まずは自らの純粋な理想を追求してみることを勧めます。

- なぜ記者を目指すのか、なぜ東北で働きたいのかを自分の経験などから率直に述べるのが大事だと思います。経験や思いをできるだけ詳細に、具体的に話すとよいと思います。一人一人志望する業界や企業は異なるので、周りを気にしすぎず、そのときに必要なことを無理せずするのが大切です。
- 筆記試験対策は早めにやりましょう!! 早いに越したことはありません!! また自分のやりたいことと向いていることを明らかにする、面接では熱意を伝える。この二点を意識すれば、皆さんにとって良い結果につながるのではないかなと思います。就活をしていると、落ち込むことやつらいこともあるかもしれませんが、あまり気負わずに臨んでほしいです。皆さんにとって悔いのない就活できるよう、応援しております。
- 理想の自分になるために苦しむことが就活だと思います。何がしたいのか、どんな大人になりたいのかを自問自答し、理想の自分のイメージを固めることが就活のコツです。ゴールを明確にすることで次の一歩が楽になります。就職活動は自らの二十数年を振り返りながら、将来の自分を思い描く大切な時期です。後悔を残さぬよう精一杯頑張ってください。
- たくさんの失敗や黒歴史を残してきた人こそ、就活では輝きます。辛いかもしれませんがそれらの思い出したくない過去を振り返り、ぜひ反省してみてください。そこから得た経験こそ、他の人にはない自分だけの武器になります。頑張ってください!
- スマートフォンですぐ記事が読める時代ですが、新聞社を目指す就活生の皆さんには、新聞は紙媒体で読んでほしいです。紙で読むと、興味がない分野の話題も自然と目に入ってくるので、見聞が広がった気がしました。これだけは誰にも負けない! という話題がひとつあるとアピールになると思います。私は、ゼミの年間研究でテーマにした「実名報道」について、面接で一貫して話しました。
- 仙台に住んだことが無い方で、河北新報社に興味を持たれた方は、選考が始まる前に一度本社に足を運び、河北新報社や仙台という都市を自分の目で見ておくことをお勧めします。インターネットや書籍に目を通すことで得られる情報もありますが、私は自分の目で会社を見たことで河北新報社への入社意欲が格段に上がりました。就職活動の時期は周りの人と進捗状況を比較し、不安になることも多いかと思いますが、焦って起こした行動が良い結果をも

たらずことはなかったなので、就職活動で行き詰った時こそ自己分析を行い、自分がこれまで力を入れてきたことについてもう一度見つめなおしてもらいたいです。

- 周りに流されることなく、自分のペースを大事にしてください。何をやりたいのか、どうなりたいのかを重視し、ゆっくり考える時間を作って欲しいです。時には、自分だけでなく、信頼できる周りの人達に相談をしてから行動するのも良いでしょう。早く就活を終えたいから焦るのではなく、吟味することが良い結果へと導いてくれることに繋がると思います。これから長い時間過ごす場所なので、妥協せずになんがごとくまで頑張ってください。